



黒小だより



令和8年6月30日

第3号

【今年度の重点目標】 ～豊かに表現し、学びを深める子の育成～

○学ぶ楽しさと成長を実感できる学校 ○元気の挨拶と思いやりにあふれる学校 ○保護者・地域の信頼で結ばれる学校

心のふるさと

校長 半田 健一

5月末に行われた運動会では、天候とグランドコンディション不良のため1日延期させていただきましたが、最後まで温かいご声援を送っていただきましたことに心より感謝申し上げます。

一生懸命な中にもほのぼのとした1年生の50m走のあと、登場した2年生の力強く、スピード感のある走りに驚きました。1年の違いってすごいです。3・4年生の「よっちょれ」はふりもバッチリ、青空の下で元気な声と鳴子の音がよく響き渡りました。5・6年生の4色リレーは練習でも全力疾走し、バトンを渡す姿に感動しました。本番は多くの声援がぐっと背中を押してくれたと思います。6年生は係の仕事でも責任を果たしました。6年間の成長ってすごいです。

6月に入ると、「余市神社例大祭」がありました。雨の宵宮から多くの子どもたちが楽しんできたようです。八幡子ども会や、子ども神輿実行委員会による子ども神輿も行われました。

私もはるか昔、住んでいた町内会の子ども神輿に参加していました。当時は小学生だけで60人以上いたと思います。低学年のうちは、ついて歩くだけか、小さな神輿で、高学年の大きな神輿を担ぎたいと思っていましたが、5・6年生は決まりごとをつくり、それを守り、きちんと神輿の運行を仕切っていたので、ちゃんということを聞きました。子ども同士の社会が成り立っていたのです。中継所が何力所もあり、酒屋さんの前で冷たいジュース、お惣菜屋さんでいなり寿司、八百屋さんで果物、牛乳販売所でソフトクリームなどをごちそうになりました。到着すると、大人はおいしそうにビールを飲み、子どもは、いただいたおやつと御祝儀を握りしめて露天に繰り出しました。ふるさとへの愛着が深く刻まれる鮮烈な原体験の一つでした。

子ども神輿が広がったのは、高度経済成長期の1960年代。全国で「子ども会」が次々と組織され、「地域文化の継承」「子どもの健全育成」などの目的が主だったようです。おそらく余市町でも一昔前までは多くの子ども会の神輿が練り歩いていたことと思います。

2000年代に入ると、少子化や少年団・習い事の増加、共働き世帯が増える中での保護者負担の問題などから子ども神輿は全国的に衰退の流れとなりました。しかし消滅はしていません。「子どもの思い出作り」「地域のつながりづくり」などの面からその重要性が見直され、運行距離を短くする、台車を利用する、地域イベントに合わせて休日に行く、はっぴを貸し出す…など形を変えての復活・存続の動きも生まれています。

伝統を引き継ぐにあたり、「ただ昔の通りにやる」という「前例踏襲」では、負担ばかりが増えることもあります。しかし、余市町のように「大切な芯（子どもの笑顔や地域のつながり）を残すために、やり方を変える」というのは、創造的・前向きな取組だと感じます。そのことにより、子どもたちの郷土愛「心のふるさと」が維持されます。学校や家庭以外の「地域の大人と子ども」の縦・横のつながりは、孤立を防ぎ、災害時や困った時に助け合える親和的なコミュニティの基盤になります。伝統を引き継ぐことは、過去を向いているのではなく、「子どもたちに何を手渡せるか」という未来に向けたバトンパスだとも考えられるのではないのでしょうか。

6年生は修学旅行です。歴史ある函館の伝統文化にも目を向けながらよく学び、仲間との2日間を楽しく過ごして帰ってきてほしいと願っています。